桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

人文研究

Studies in Humanities

2019 年 3 月
March 2019

桜美林大学　人文学系／芸術・文化学系
J. F. Oberlin University　Division of Humanities / Arts and Culture

英国におけるコミュニティダンスの発展と現状

稲　田　奈緒美

キーワード：コミュニティダンス、コンテンポラリーダンス

1.　研究の目的、方法、先行研究

1. 1　研究の目的

近年、英国型をモデルとする、コミュニティダンスの普及が日本で始まっている。これは主としてコンテンポラリーダンスのダンサー、振付家が地域の文化施設、劇場、学校、医療・福祉施設などで、ダンス経験や障がいの有無、年齢、性別などに関わらずあらゆる参加者を対象に、比較的廉価な受講料あるいは無料で行うワークショップ等を指す。本稿の目的は、英国のコミュニティダンスを概観し、その成立と背景、現状を明らかにすることである。

1. 2　研究の経緯と方法

2005 年、ロンドンにある劇場、舞踊高等教育機関等でコミュニティダンスの企画、運営、教育等に携わる関係者へのインタビューを行い、収集した資料の分析と合わせて報告書を執筆した（稲田、2006）。2007 年以降は、英国ミドルセックス大学クリストファー・バナーマン教授と日英におけるコミュニティダンス他の共同研究を行った。また独自にコミュニティダンスに関連する事例、現象の調査、研究を行い、その成果を研究会、学会等で発表している。

本稿の研究方法は、前述の研究を基に英国のコミュニティダンスに関する文献資料とネット上の公開資料、シンポジウム、講演会、ワークショップ等での関係者による発言、現地での聞き取り調査の結果を主として用いながら分析するものである。

1. 3　先行研究

英国ではコミュニティダンスの調査、研究は非常に多岐にわたっている。教育、福祉、医療、ソーシャル・インクルージョン、更生、地域活性化など多様な目的、用途で実施され、参加者も異なっており、それぞれの切り口による調査、研究が可能なためである。

一方、日本でコミュニティダンスの用語と概念が紹介された文献は、「共生教育におけるアダプテッド・ダンスの役割」(大橋、2001) が最初期と見られる。ここで大橋は (Green, 2000) に依拠しながら脚注で、「コミュニティ・アートの流れにおいて、特に、ダンスのパフォーマンスやワークショップなどを活動の中心に置くもの」、「現在、コミュニティダンスとは、学校教育以外の公共におけるダンス活動全般を指すと考えられる」(大橋、2001：36) と紹介している。また、タイトルの「共生教育（インクルーシブ教育)」「アダプテッド・ダンス」に関連、類似するものとして、西洋子らによる障がいのある子ども達に対する治療的活動[1]、さらに心理療法としてのダンスセラピーをあげている（大橋、2001：32-34)。

続いて増山尚美は、大橋の記述からワークショップという参加型教育手法に着目し、米国の振付家パット・グラニーによる刑務所でのアウトリーチ活動をコミュニティダンスとみなして紹介している。(増山、2003)

コミュニティダンスの用語と概念を用いた日本での実践的な研究は、南村千里による「コミュニティダンスの意義－『アートプロジェクト検見川送信所 2001』での実践を通して」(南村、2003) に始まると考えられる。ただし、調査対象の主催者は、コミュニティダンスの語と概念は用いておらず、地域でのアートプロジェクトという位置づけである。

英国の事例を実践的に研究した例としては、高野牧子がラバン[2]で開講している子供対象の「クリエイティヴ・ダンス・コース」及び、ロンドン各地で行われていたダンス・ワークショップを調査したものがあり、分析に際してコミュニティダンスの教授法を参照している（高野、2006:71)。また、「地域療育拠点での親子活動“ふれあい遊び・身体表現遊び”―山梨県立あけぼの医療福祉センターでのコミュニティダンス実践」(高野、2009) で日本の事例研究を行っている。

以上から、コミュニティダンスという用語と概念が日本に伝わってきた際、既にコミュニティダンスに類する舞踊教育活動、医療活動、生涯学習や障がい者に向けたダンス、ダンスセラピー、アウトリーチなどが継続的、あるいは単発のプロジェクトとして行われていたことがわかる。多岐にわたるこれらの活動を包括し、調査研究の際に参照する用語と概念として徐々に認知されながら、舞踊研究で用いられるようになったと考えられる。

現在では、日本でのコミュニティダンスの普及[3]につれて研究が増えており、2011 年から白井麻子による実践的な研究報告が多数発表され、2014 年から岩澤孝子による札幌市での事例研究、2016 年から木野彩子による修士論文を基にした多方面にわたる論文など、主として舞踊教育学、体育学の実証的な見地からさまざま論考が発表されている。

2 英国におけるコミュニティダンス

2.1 コミュニティダンスの定義

英国におけるコミュニティダンスの定義は明確ではなく、目的や実践家、関係者に

よって異なり、広く曖昧である（Amans, 2008）（Houston, 2008）。Amans はコミュニティダンスを統括する団体であるコミュニティダンス財団（Foundation for Community Dance, 以下 FCD ）のウェブ上に記された 2006 年時点の定義として、「一連の参加型ダンスの実践であり、特定の価値、意図、質、方法論によって定義される。コミュニティダンスは幅広い実践、様式を包含するものであり、特定のダンス様式のことではない」（Amans, 2008：4）を紹介している。しかし、既に 2010 年 8 月時点では、ウェブからこの文章は削除されている。また、FCD クリエイティブ・ダイレクターのケン・バートレットは、2008 年の来日時のシンポジウムで、「コミュニティダンスは、誰でもすべての人のためのものであり、どこでもすべての場所で起こり、様々な種類のダンスを含み、高度な技能を有するプロフェッショナルなダンスの専門家によって主導される」（Bartlett, 2008）と語っている。バートレットは、2006 年の定義をわかり易く言い換えると同時に、コミュニティダンスをファシリテートする人が素人ではなく、プロフェッショナルである点を明確に挙げた点が注目できる。さらに、FCD は現在では「People Dancing - the foundation for community dance」と名称を変更し、団体の説明をウェブ上で「コミュニティと参加型ダンスのための英国の発展的な組織、会員組織」としている。この団体については後述する。

一方、コミュニティダンスのキーパーソンであり、コンテンポラリーダンスの複合的な施設「ザ・プレイス」[4] の「ラーニング・アンド・アクセス」部門ダイレクターであるクリストファー・トムソンは、2005 年の来日時の講演で、「コミュニティダンスとして知られるようになったものは、ダンサーまたはダンス教師によって主導されるものであり、ダンスを年齢や経歴や能力に関わらず、すべての人にもたらすことを目的としている。そのアイデアは、すべての人にダンスを経験する機会が持てるようにすることであったし、究極的な目的は、人々がより気持よく感じ、肉体的、精神的、社会的な健康を向上できるようにすることだった」（Thompson, 2005）と説明している。

以上から、コミュニティダンスの定義は大よその枠組みを共有しつつ、時代や実践者によって状況に応じて変更されてきたことが理解できる。このように柔軟に変化する定義を基に、以下の節で発展の背景を考察する。

2. 2　コミュニティダンスの始まりと発展

英国におけるコミュニティダンスの発展を理解するには、背景にあるコンテンポラリーダンスがおかれた舞踊史的、社会的、思想的な位置、状況を幅広く分析することが必要である。但し、英国においてコンテンポラリーダンスは字義どおりに同時代のダンスであり、モダンダンス以降のポスト・モダンダンスなどを含めたダンス全般を指している。ダンスのスタイルとしては、ロンドン各地で行われているダンス・クラスや舞台公演を見る限り、マース・カニングハム、ホセ・リモンのテクニックをベースとして、リリース・テクニック、コンタクト・インプロヴァイゼーション、フィジカル・シアター、バレエ、ヨガ、ヒッ

プホップ、南アジアやアフリカの民俗舞踊などを独自に混合させたものが多い。

20 世紀前半の英国舞踊界ではバレエが主要な劇場芸術であったため、1960 年代にアメリカからマーサ・グレアム、マース・カニングハムらのモダンダンスやポスト・モダンダンスが移入されてもしばらくは、コンテンポラリーダンスはバレエと比較してマイナーな地位にあった[5]。観客が少なく、チケット収入も助成金も少ないカンパニーやダンサーらは、観客開拓と生活費を稼ぐためにツアーを行い、アウトリーチや教育活動などを行うことが必須であった。現在、英国にはダンスの高等教育機関として、ラバン、ロンドン・コンテンポラリー・ダンス・スクールがあり、複数の大学に舞踊科が設置されているため、国内外からダンサー、振付家を目指す若者が集まり、毎年多くの卒業生を輩出している。そのため、プロフェッショナルな舞台活動の仕事を得るのは容易ではなく、コミュニティでの非ダンサーを対象とする活動も行いながらキャリア形成をするのが一般的となった。

一方、第二次世界大戦後の英国社会ではコミュニティの衰退を受けて、1960 年代にコミュニティ・アート運動が始まり、その流れの中で「コミュニティダンス」または「ダンス・ワーキング・ウィズ・コミュニティ」と呼ばれるダンスが 1970 年代半ばに起こった。具体的には、子供、若者、老人、労働者、障がい者、失業者、移民等を対象とし、学校、コミュニティセンター、障がい者施設、刑務所、病院などに出向いて行なわれた。ピーター・ブリンソンは、それを少数ではなく多数の関心、ハイ・アートではなくポピュラー・アートを求めたものであり、生産・消費、演者・観客、創造者・受容者、創造・参加、プロ・アマなどの差異の消滅であったと説明している。このような思想の背景には、かつての 19 世紀的なエリートによる芸術ヒエラルキーへの反発があり、幅広いジャンルで行なわれていた挑戦的、先進的な芸術活動を支えたイデオロギーがある、と記している（Brinson, 1991）。

このようなダンスの民主化とも言える思想は、1960 年代のアメリカで生まれたポスト・モダンダンスと共通するものである。ポスト・モダンダンスでは、特別な技術を伴わない簡単な動きがしばしば使用され、ダンスの素人も参加した。トレーニングを受けたダンサーだけでなく、誰でもできるダンスとして、ポスト・モダンダンスが広げたダンスの概念と実践が、一般の老若男女を対象とするコミュニティダンスの領域を準備したのである。

しかし、当時コミュニティでダンスを教えていた多くはダンサーや振付家であり、彼らはプロとして活動するためのトレーニングを受けてはいても、コミュニティで様々な人に教えるための教育は受けておらず、サポートもなかった。そのような背景から、1981 年、ラバン・センターに「コミュニティダンス・アンド・ムーヴメント・コース」が開設された[6]。

1986 年になると、コミュニティで教えるダンサーらが情報を交換し、サポートし合えるネットワークを築くために、「National Association of Dance and Mime Animateurs」が、約 30 名の会員によって創設された。「マイム」が入っているのは、コミュニティダンスはバレエやモダンダンスのようなテクニックを使用したり、強調するのではなく、表現的なものであり、マイムや簡単なムーブメントが用いられたためである。「Animateurs」

とは「推進者」の意味である。

このように、初期のコミュニティダンスでは個々のダンサー、振付家が推進者となり、活動を通して徐々に土台ができ、ネットワークと構造が形成されてプロフェッショナル・オーガナイゼーションの結成に至ったとまとめられる。この組織は名称を変えながらメンバーを拡大し、1995 年に前述の FCD と改称した際には、約 400 名の会員を擁していた。2009 年時点で、FCD は約 1800 の個人と組織の会員を擁し、約 4600 名のプロフェッショナルなダンスの実践家が関わっている。

FCD はコミュニティダンスのための支援組織として情報提供、研修、ネットワーク作りを推進し、隔週のメールニュース、季刊『Animated』を発行しているが、その重要性と実績を助成金の獲得額から指摘できる。

1946 年に英国芸術評議会（The Arts Council of Great Britain）が設立された際の理念は、プロフェッショナルによるエクセレントな芸術に対して支援を行なうことであったため、ダンスで助成の対象となったのは、サドラーズ・ウェルズ・バレエ（現・ロイヤル・バレエ、バーミンガム・ロイヤル・バレエ）、バレエ・ランベール、バレエ・ヨースの、三団体のみであった（アーツカウンシル・イングランド。以下 ACE, 2004：14）。1986 年、FCD の基となる団体が設立されると、英国芸術評議会から助成金を受け始めたが、それは個々のプロジェクトに対するものであった。1990 年には、年間を通して助成を受けられる団体として認められ、比較的まとまった助成金を獲得する。2009 年時点で、英国芸術評議会からの年間を通したレギュラー・ファンディングを 20 万ポンド（£1 ＝￥140 で約 2800 万円）、その他プロジェクトごとに各地域の英国芸術評議会や複数の財団から、約 44 万 7 千ポンド（約 6300 万円）の助成金を受けている（FCD, 2009）。

FCD が 2000 年に行った調査によれば、年間約 73000 件のコミュニティダンスが行われ、約 480 万人が参加している。調査対象は、プロフェッショナルのコミュニティダンスアーティストの主導によるもの、またはダンスカンパニーやエージェンシーが主催したもの、つまりは国や地域から何らかの公的助成金を受けた活動のみであり、それ以外は含まれていない。同時期、英国芸術評議会からレギュラー・ファンディングを受けている、プロフェッショナルによるダンス公演の観客動員数は年間 140 万人であった。

このように FCD の会員数、助成金、事業数と参加者の大幅な増加から、コミュニティダンスに関わる人と事業の急速な発展を知ることができる。

但し、FCD 及びそのメンバー等が英国芸術評議会から公的助成金を得て活動を継続することについて課題や問題点もある。「アームズ・レングス」という適度な距離を保つことで自律性を確保していると一般には言われているが、現場の関係者からは必ずしも十分に機能していないことや、様々な不備、問題点への不満を聞くことができる。公的助成金を得ながらそれを決定、配分する組織、文化政策を策定する政府との対等な関係を保ち、自由闊達な芸術性を保つことは必ずしも容易ではない。

2. 3　コミュニティダンス発展の背景

2. 3. 1　ダンス・エージェンシーによる情報、サービス、支援の組織化と英国芸術評議会

次に、コミュニティダンスが急速に発展した背景を考察する。第一に人、場所、情報、助成金を含めたシステムが効率的に働くことを促進、支援するためのダンス組織、団体による積極的な活動がある。

まず、英国芸術評議会には 1979 年にダンス部門が設立され、ダンスの政策と公的助成を専門的に行うようになった。そして、英国芸術評議会が地域ごとにダンスを統括する団体として、ナショナル・ダンス・エージェンシー（以下、NDA）を創設し、1989 ～ 1991 年の間に発展した。NDA は英国内（スコットランド、ウェールズは含まない）に 9 か所[7]、傘下に地域のリージョナル・ダンス・エージェンシーが約 30 あり、その下部に個々のダンス関係者、カンパニーがいるというように、ダンス界がピラミッド型の明確な構造を形成している（稲田、2006:30）。ナショナルとリージョナルのダンス・エージェンシーは、プロフェッショナル、コミュニティ、教育のためのダンス活動を行っており、各地域でダンスの情報を得たい人、経験したい人が最初にアクセスする地域の拠点である。さらに、NDA が統括する 9 地域は、地方分権化された[8]ACE の 9 つの管轄とほぼ重なっているため、地域に密着した活動を容易に行えるシステムが整えられている。

また、様々なダンス団体が設立されている中で、ジャンル、職種などを問わない統括団体として「Dance UK」がある。ここではダンスに関する情報提供、ネットワーク構築、技能や安全の向上などに並んで、アドヴォカシーとロビーが主要な活動として明確に挙げられており、2006 年には「ナショナル・キャンペーン・フォー・アーツ」と共に「ダンス・マニフェスト」を作成し、政府に提出した。FCD も同様であるが、関係者が団体を組織し、あるいは協働しながら明確な使命や戦略を持ってアドヴォカシーやロビーを展開することによって、ダンスを幅広く発展させるためのシステムを整え、資金を獲得する推進力を果たしていると指摘できる。

2. 3. 2　教育におけるダンスの活用

コミュニティダンス発展の背景として二番目にあげられるのは、ラバン（文末注 2 参照）に始まる青少年教育とダンスの結びつきである。

ラバンによる「すべての人は踊ることができ、すべての人がそれぞれ独特な動き方をすることができる」という、“ムーブメント”を基本においたダンスと創造性に対する考え方は小学校教師に影響を与え、そのトレーニングを多くの教師が導入した。2005 年時点でダンスは、英国の「ナショナル・カリチュラム」に採用されている（Thompson, 2005）。

このような素地が、近年の教育現場におけるダンスの活用に影響を与えたと考えられる。具体的には、1997 年トニー・ブレアの労働党が政権を握ると、1979 年から続いたマーガレット・サッチャーの保守党政権による新自由主義的政策から舵を切って、教育を重要

な政策として掲げ、将来の創造的な経済発展のために、青少年の創造的、かつ文化的な教育への取り組みを要請したことに始まる。1999 年には、「私たちの未来のすべて:創造性、文化、教育（All Our Futures: Creativity, Culture and Education）」というレポート[9]が発表され、2002 年から「クリエイティブ・パートナーシップ」が導入されて、学校に芸術家やクリエイティブな仕事に従事する人々が派遣されるようになり、また、学校での美術、ダンス、演劇、音楽の授業を奨励するための「アーツマーク」が開始された。これは、従来の芸術教育である「アート・エデュケーション」ではなく、アートの可能性を教育に生かす「アーツ・イン・エデュケーション」の広がりとも呼応している。教育行政の変化はダンスに限らずアート全般を対象としているが、ダンスがその重要な一角を占めたと言えよう。特にロンドンは、多民族、多言語都市であるため、言語を介さずに身体で参加、コミュニケーションが可能であるダンスは、英語が話せない子供たちに有効である。

現在、コミュニティダンスの多様な活動の中でも、「ユース・ダンス（Youth dance）」の発展が著しい。これは、ほぼ 10 歳から 19 歳の青少年を対象とした学校内外、カリキュラム内外でのダンス活動であり、より多くのダンス経験の機会を提供し、創造性を涵養し、才能を発掘することなどを目的としている。発展を担う「ユース・ダンス・イングランド」が、ACE、子供・家庭・学校省等によって設立され、文化・メディア・スポーツ省と共に決定した規定に準じて活動しており、行政の垣根を越えた直接的なコミットメント「National Brief」[10]を参照している。

2. 3. 3　ソーシャル・インクルージョン

三番目のコミュニティダンス発展の背景は、社会的な要因である。第二次大戦後に顕著となったコミュニティの崩壊、サッチャー政権の政策の結果としてもたらされた教育、医療の荒廃、若年層の長期失業者の増加、貧富の差の拡大などによる、「ソーシャル・エクスクルージョン（社会的排除）」が問題になる中で、ブレア政権は「コミュニティの再生」と、格差拡大によって社会から排除された人々の「社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）」を掲げた。そして「教育」「コミュニティの再生」「社会的包摂」のための文化政策、社会政策が行なわれるようになった。ACE では、96 年に芸術支援プログラム「Arts for Everyone」が始まりっており、英国の芸術支援は「プロによるエクセレンス」から「アクセス、ポピュラリティ」へと、大きな転換がもたらされた。かつては一部のエリート芸術家と観客を対象としていた助成が、市民、青少年参加型のアマチュア活動と、一部の商業活動へ支出を増加させた。また、レギュラー・ファンディングを受けるダンスカンパニー、劇場等にはそれに見合う社会貢献、教育活動が求められている。

2002 年には ACE が「ダンス・インクルーデッド」の優れたモデルを開発するためにプロジェクトを募集し、45 団体から 6 つの劇場、ダンスカンパニー等が選考され、ダンスセラピー、非行少年の再犯防止、高齢者の心身の健康、学校、ホームレスに対するプロジェクトが助成金を受けて実施された。活動はアート・リサーチャーによって調査、分析、

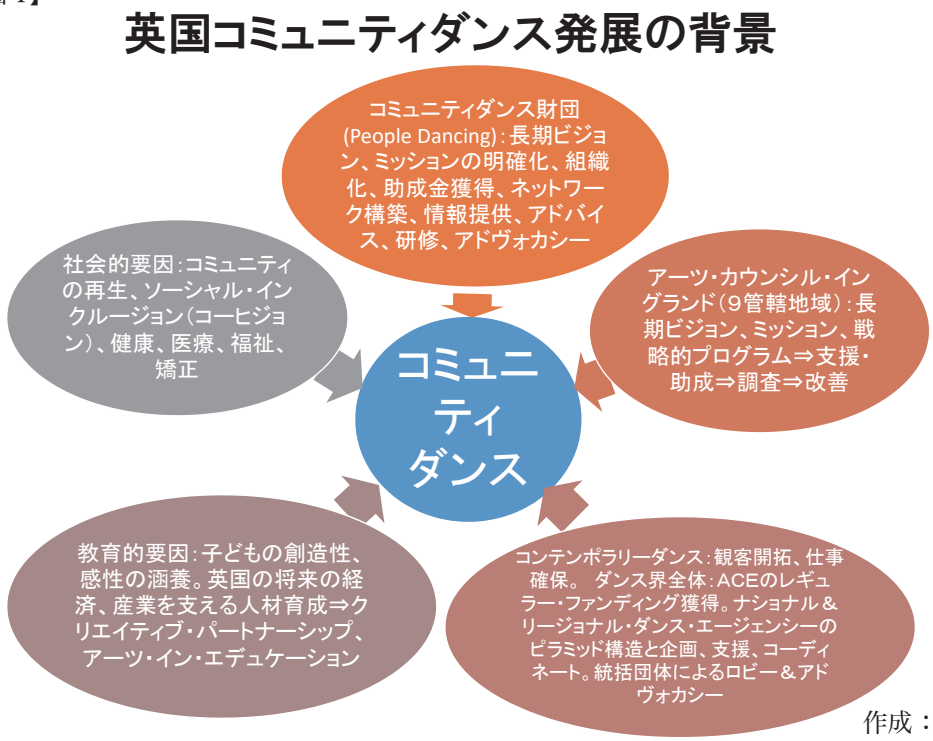
報告（ACE, 2006）されており、助成金のばら撒きや一過性の事業に終わらないよう設計されている。

但し、ソーシャル・インクルージョンという概念自体が、あるグループを包摂することは、同時に新たな排除を生む可能性があるため、文化的多様性を維持することの困難さも指摘できる。近年では、「インクルージョン」ではなく「コーヒジョン（つながり、団結）」という用語の使用が増えており、これも「インクルージョン」という用語が招く混乱や誤解をさけるためである。

2. 4　まとめ

以上のような教育的、社会的要望に起因する、ACE 等からなる文化政策の転換に対して、コミュニティダンス及び、その背景にあるコンテンポラリーダンス界が比較的スムースな対応が可能だったのは、既に考察したコミュニティダンス財団、ピラミッド型のナショナルとリージョナル・ダンス・エージェンシー等による情報発信、ネットワーク、活動支援、実践者のトレーニングなどがあったためである（稲田、2006）。このようなコミュニティダンスの始まりから発展にいたる背景を、コンテンポラリーダンス、コミュニティダンス財団（FCD）、アーツカウンシル・イングランド（ACE）、社会的要因、教育的要因 6 つにまとめたのが【図 1】である。

【図 1】



作成：稲田

3.　現状と課題

3. 1　ロンドンオリンピック・パラリンピックの文化プログラムによる拡大

上記でまとめたコミュニティダンスをとりまく環境と団体、組織がうまく呼応、連携し、さらなる発展をもたらしたのが、2012 年のロンドンオリンピック・パラリンピックであった。2008 年の北京オリンピック閉会後から始まった、4 年間にわたって芸術文化活動が推進される文化プログラムである「カルチュラル・オリンピアード」が英国中で展開され、合計約 4300 万人が参加したと公表されている。行われるにあたり、誰でもどこでもどんなダンスでも包含可能なコミュニティダンスは大いに活用された。多くの公的助成金を得て様々なコミュニティダンス及び、関連するプログラムが実施され、多くの参加者を集めたのである。

その典型的な例が、「Big Dance」である。これは FCD とロンドン市長オフィスによって 2006 年から始められた活動で、隔年で英国のみならず世界各地でも開催されるものである。英国を代表する振付家による一つの振付を、各地で一斉に行うものであり、アマチュアでもプロでもダンス経験に関わらず、年齢、障がいの有無、性別、民族などに関わらず無料で参加可能で、開催場所は公園、広場、駐車場、学校、ショッピングセンターなど様々である。最も盛り上がりを見せた 2012 年は、「Big Dance」に関連する 3500 以上の活動が実施され、オリンピック開幕直前の「ロンドン 2012 フェスティバル」では、ロンドンのトラファルガー広場に何千人もの人々が集い、英国ロイヤル・バレエ団常任振付家であり評価の高いウェイン・マクレガーの振付を一斉に踊った。このような注目を浴びる活動によって、コミュニティダンスが広まり、さらなる発展の契機となったと言える。

しかしながらこのような特別な契機と盛り上がりを、「レガシー」として継続することは容易ではない。「Big Dance」も 2016 年、英国を代表する振付家であるアクラム・カーンの振付によるトラファルガー広場でのパフォーマンスを最後に、10 年間の活動を終了した。2018 年はオーストラリアで行われているが、英国での実施はない。終了した理由は、関係者への非公式なヒアリングによると、開催される各地、各団体の担当者の負担の増加と方向性の違いなどによる。規模が拡大するにつれ、事前に行われる振付の練習やパフォーマンス当日に向けた様々な調整などで負担が増大し、担当者にしわ寄せがいくこと、2012 年のロンドンオリンピックという大目的を終えた後もモチベーションを維持する困難さなどから、徐々に実施団体、担当者らの考え方が変わってきたようである。

3. 2　目的別の細分化傾向

「Big Dance」のような大規模なイベントが役目を終えた一方で、現在のコミュニティダンスは目的別に細分化され、個々の活動を展開している様子が見られる。FCD は現在では「People Dancing - the foundation for community dance」と名称を変更し、「コミュニティと参加型ダンスのための」組織として、その目的に「コミュニティ」と「参加型」を

並列させることで、より多くの種類のダンスを包含できるようになったと考えられる。ウェブ上のホームページには、「2」で前述したコミュニティダンスの定義や歴史、ミッション、戦略などは掲載されておらず、かつての定義などは雑誌『Animated』のアーカイヴに残るのみである。一方、「Creative Programmes」のタグの下に並ぶのは、「Health and wellbeing」、「11 Million Reasons to Dance」、「Early Years Dance」、「Older people dancing」、「Dance for people living with Parkinson's」など対象や目的を絞ったプログラム名である。また、筆者が 2017 年にスコットランドのグラスゴーで開催された「People Dancing's International Conference 2017」に参加した折も、個々のプレゼンテーションやワークショップで掲げられていたのは、上記と同様に「高齢者の健康」「認知症」「パーキンソン病」など、より具体的に目的、対象者を絞り細分化されたダンスであった。

一方、「コミュニティ」や「参加型」のダンスを現場で企画、実施している劇場に目を転じると、ロンドンにあるダンス専門のサドラーズウェルズ劇場でも同様の傾向が伺える。この劇場では世界の一線で活躍する様々なジャンルのダンスカンパニー、ダンサーが公演を行うことと並行して、地域や観客参加型のプログラムも多数行っている。担当する「クリエイティブ・ラーニング」部門は、いわば劇場のアウトリーチ・セクションであり、教育プログラムを担当し、ダンスを通じた“クリエイティブ・ラーニング（創造的な学び）”として、“創造性”の重要性を強く打ち出している。その背景には、諸問題があふれる現代社会において、ダンスには人々を繋ぎ（コネクト）、自信を高め、健康的な生活を促進する力があるのだ、という信念があり、そのプログラムを「コネクト」と総称していた。

具体的には、個々のプログラムを、劇場のあるイスリントン地区を中心に、個人や団体、学校やクラブに向けて提供している。それは、サドラーズウェルズ劇場のビジョンである、芸術的な高みを目指す卓越性（エクセレンス）を保ちながら、同時に劇場を新しい観客や経験へ開いていくという姿勢を体現している。参加するための資格や制限は設けられておらず、ダンスを見たい人、ダンスについて学びたい人、実際に踊ってみたい人ならだれでも参加することができるため、参加者の年齢、経歴などは実に幅広い。また、障がいのある方へ積極的にプログラムを提供している。ダンスの種類は、タンゴ、フラメンコ、ヒップホップ、ファミリー・ショーから、先鋭的なコンテンポラリーダンス、バレエまで、多種多様である。2008/2009 年のシーズン 1 年間で、「コネクト」は、約 500 のワークショップとイベントを行い、10000 人以上もの人が参加した。

コネクトで催される様々な教育プログラムは、大劇場（1560 席）での公演プラグラムとも繋がっている。特に「コネクト・フェスティバル」では、演じられるダンスの多くが、公演のために国内外から劇場を訪れているプロフェッショナルなダンス・アーティストや、劇場と提携している厳選されたプロフェッショナルなアソシエイト・アーティストが主導した活動の成果である。

「コネクト」プログラムのハイライトが、小劇場（180 席）で開催された「コネクト・フェスティバル」である。筆者が見た、2010 年 3 月に行われたフェスティバルは、「コネク

ト」で行われている様々なプログラムのショウケースであるとともに、そこに参加している近隣地域のコミュニティの 2000 人にものぼる人々に、サドラーズウェルズ劇場の舞台で踊るチャンスを提供するものであった。小学生から高齢者までが出演する、様々な形態による 10 のダンス・パフォーマンスが上演されたが、オープニングを飾ったのは「カンパニー・オブ・エルダーズ」である。これはサドラーズウェルズ劇場のレジデント・カンパニーで、61 歳から 87 歳までの 25 人の男女で構成されていた（2010 年 3 月時点）。平均年齢は 79 歳で、ダンサーたちは高齢になってから、初めてダンスを習い始めた人ばかりだが、現在はプロフェッショナルなダンスカンパニーの一員として、定期的なレッスンやリハーサル、国内外での公演を行っている。

この団体が注目を集めたのは、高齢者によるプロフェッショナルなダンスカンパニーという特異さであるが、その宣伝効果を高めたのはテレビ番組であった。2009 年夏に BBC が製作した、カンパニーのドキュメント番組「Save the last dance for me」（Presenter: Alan yentob, Director: Fran Landsman）の放送が終わった直後から、サドラーズウェルズ劇場には問合せの電話が殺到し、自分もカンパニーに入りたいと願う高齢者の長いリストが出来上がったという。テレビというマスメディアとのコラボレーションによる、情報発信と宣伝の成功例と見做せる。

このような高齢者によるダンスが現在では特化され、それのみで 2014 年からは「エリクシール・フェスティバル」が開催されている。筆者が見た 2017 年のフェスティバルでは、大劇場と小劇場での公演、ワークショップなどが催された。ここでもすべてを含む「コネクト」から高齢者に特化した「エリクシール」への細分化が認められる。

3. 3　現在の課題

順調に発展、拡大を続けるかに見えるコミュニティダンスであるが、様々な課題も指摘されている。2.2 で記したように、元々コミュニティダンスは従前のダンスのヒエラルキーを壊すことも目指されていたものの、現状ではヒエラルキーは確固としてあり。最上層から、「報酬を受けるダイレクター、振付家」、「報酬を受けるパフォーマー、特に有名なカンパニー所属」、「高等教育または職業教育における教師」「無報酬のパフォーマンス、振付作品」と続き、その最下層に「コミュニティまたは学校におけるダンス教師」が置かれている（Rachel, Aujla, 2017）。このヒエラルキーは社会的な認知度や報酬を反映している。

また、財団の創設 30 周年を祝した『Animated』特別号では多くのポジティブな寄稿がある中で、Maldoom OBE は、かつては「フリンジ」だったコミュニティダンスの活動が「メインストリーム」に発展したことを喜びながら、その現場から「ART」という言葉が聞かれなくなったことに疑問と注意を呼び掛けている（Maldoom, 2017）。コミュニティダンスが芸術としてではなく、福祉、教育、医療などの芸術文化の外部性のみで語られ、利用されるようになった現状に対する批判であり、コミュニティダンスが保つべき

芸術性と実践的な目的とのバランスが課題であるといえる。

4. 全体のまとめ

以上、英国におけるコミュニティダンスの発展と現状を概観してきたが、ダンス界が社会にコミットしながら、その変化に臨機応変に対応し、効率よく運営するための組織を整え、もって助成金を獲得しながら発展してきた経過をたどることができた。一方で、課題もまだまだ多い。英国での今後の社会や芸術全体の変化と、それに対応して変化、発展する英国コミュニティダンスの状況を継続して観察、研究することで、日本のコミュニティダンスの発展にわずかではあるが寄与できれば幸いである。

【引用文献一覧】

Amans, Dian, “Community dance - What That?”, *An Introduction to Community Dance Practice*, Amans, Diane ed.,Palgrave Macmillan, 2008, pp3-10

Arts Council England, Submission to the Culture Media and Sport Committee Inquiry into Dance, 2004

Arts Council England, Dance Included: towards good practice in dance and social inclusion, 2006

Bartlett, Ken, Community Dance in UK「英国のコミュニティダンス」『DANCE LIFE FESTIVAL 2008 ダンスが日本を救う？―日本におけるコミュニティダンスの確立に向けて―』シンポジウム、2008

Brinson, Peter, *Dance as Education Towards a National Dance Culture*, The Falmer Press, 1991

Dance UK, National Campaign for Arts, Dance Manifesto, 2006

Farrer, Rachel and Aujla, Imogen, Challenging dance hierarachies: perceptiions of success in community dance practice, *Animated Summer 2017*, ed. People Dancing - the foundation for community dance, published by Countrywide Publications, 2017, pp29-31

Foundation for Community Dance, Vision, History and Strategic Objectives, August 2009, FCD

Green, Jill, Summer Dance Connections: A Community–Based Education Program, *The Journal of Physical Education*, Recreation & Dance, 71, April, 2000

Huston, Sara, “Dance in the Community”, *An Introduction to Community Dance Practice*, Amans, Diane ed.,Palgrave Macmillan, 2008, pp11-16

Maldoom, Royston, The ‘A’ word, *Animated Autumn/Winter 2016/2017*, ed. People Dancing - the foundation for community dance, published by Countrywide Publications, 2017, pp16-17

Thomson, Christopher, The origins and development of Community Dance in Britain, 2005

Tony Hall, The Dance Review, Department for Children, schools and Families, Department for Culture, Media and Sports, 2008

稲田奈緒美「ロンドンの高等教育機関・劇場における調査研究報告」平成 16 年度～ 17 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「アートマネージャー養成システムの構築に関する基礎的研究」（課題番号 16602016）（研究代表者　古井戸秀夫）、2006

大橋さつき「共生教育におけるアダプレッド・ダンスの役割」『舞踊学』第 24 号、舞踊学会、2001

高野牧子「イギリスにおける親子ムーブメント教室」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第一号、2006
高野牧子「地域療育拠点での親子活動“ふれあい遊び・身体表現遊び”—山梨県立あけぼの医療福祉センターでのコミュニティダンス実践」『保健の科学』第 51 巻 6 月号、杏林書院、2009
西洋子「障害のある人々を対象とする身体表現活動の指導の現状と課題」『舞踊学』第 22 号、舞踊学会、1999
増山尚美「コミュニティダンス・ワークショップにみる生涯学習」2003
南村千里「コミュニティダンスの意義 —『アートプロジェクト検見川送信所 2002』での実践を通して—」横浜国立大学大学院修士論文 2003

注

1　西は、障がいのある人を含めた舞踊教育を論じる際に、「コミュニティを基盤としたダンス活動が成熟しているイギリス」の先進的な事例として、英国のダンス・カンパニー「Candoco」、及び、ウォルフガング・シュタンゲの主宰する「アミキ」をあげている（西、1999:57）。シュタンゲは、1989 年に日本で初めてワークショップを開き、1991 年に「アミキ」の公演をしており、1999 年の「Candoco」初来日公演は大きな反響を得た。

2　ドイツ表現主義舞踊のルドルフ・フォン・ラバン（1879-1958）が、1938 年にイギリスへ亡命し、第二次世界大戦後に Art of Movement Studio をマンチェスターに設立した。後にダンスの高等教育機関である Laban Center となり、現在、Laban と改称している。

3　日本での普及の契機となったのは、JCDN（ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）が 2008 年に国内各地で主催した、《DANCE LIFE FESTIVAL 2008 ダンスが日本を救う？—日本におけるコミュニティダンスの確立に向けて—》のシンポジウム、ワークショップなどである。

4　ロンドンにある、劇場、ダンス学校、子供や一般の人向けのダンス・クラスなどを有する複合施設。

5　英国で最初のモダンダンス・カンパニーと見なされるのが、1967 年に創設されたロンドン・コンテンポラリー・ダンス・シアターである。カンパニー・メンバーのリチャード・アルストン、シオバーン・デービスらが、ロンドン・コンテンポラリー・ダンス・スクールを第一期生として卒業したのが 1969 年である。

6　コースは MA ではないが、21 歳以下の学生は入学できず、ダンスの職業的経験、あるいはソーシャル・ワーカー等福祉領域の職業経験が必要である。つまり、新卒者を輩出する教育機関ではなく、既に職業経験のある者が技量を磨き、スキルアップすることが目指されている（稲田、2006）

7　バーミンガム、グラスゴー、ロンドン、ニューキャッスル、ノース・ウェスト、ノッティンガム、サウス・ウェスト、サフォーク、サウス・イースト、スィンドン、ヨークシャー

8　1995 年、英国芸術評議会に対して地方分権化と助成システムの見直し、縮小が求められ、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの 4 つに分割された。これ以降、本稿で扱う英国芸術評議会は、アーツカウンシルイングランド（ACE）のことである。現在、ACE には 9 つのリージョナル・オフィスがあり、各地域における助成金を投じた組織と活動に対して責任を負っている。

9　教育技能省と文化・メディア・スポーツ省が共同で「英国の創造的教育・文化教育諮問委員会」に委託した研究調査の結果報告。

10　ロイヤル・オペラ・ハウスのエグゼクティヴ・ダイレクター、トニー・ホールが政府の委託によって執筆した、ダンス教育とユース・ダンスに関する「The Dance Review」の提言に基づく。英国のユース・ダンスは、339 のグループを持ち、26 のネットワークを築き、595 人のダンス実践家が参加していると記されている。